8. 福井城跡（ふくいじょうあと）

（北陸新幹線建設 15-1･2 地区）

所 在 地：福井市豊島1丁目

調査原因：北陸新幹線建設事業

調査期間：平成 27 年 4 月 1 日～11 月 30 日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：15-1 地区：1,030 ㎡

15-2 地区：1,160 ㎡

時　　代：古墳・平安・江戸

位置図（S＝1/25,000）

調査の概要　福井城跡 15-1・2 地区は、国道 158 号（通称、城の橋通り）と足羽川に挟まれた部分の JR 北陸本線東側に隣接して位置します(南:15-1 地区，北:15-2 地区)。その付近は、城郭存続時には「城ノ橋」と呼ばれる外曲輪に当たり、おもに武家屋敷が建ち並ぶ場所でした。

15-1 地区は、城ノ橋のうち小道具町と呼ばれる辺りになります。その北側の 15-2 地区は、調査区北側が城ノ橋町や長濱町と呼ばれる町屋地の一部にかかります。なお、両調査区とも近代以降の開発の影響を受けており、屋敷地内の建物配置や屋敷境等の詳細がすでに失われた部分もありました。

15-1 地区の遺構と遺物　15-1 地区では、調査区北半部に南北にのびる砂利敷道路を確認しました。江戸時代の城下絵図によると、調査区内には道路の東に 1 軒の屋敷地、西に 3～4 軒分の屋敷地があったようです。

東の屋敷地は、城下絵図によれば江戸時代を通して敷地の区画は変化しなかったようです。しかし、道路の東側に離れて平行する絵図に認められない溝（溝 151-5）が確認され、築城当初の一時期には屋敷地と道路の間が約 5mほど離れていたことがわかりました。この溝は、JR 線高架建設時の発掘調査等でも確認しており、直線的に川まで延びていたと考えられます。幅約 5m、調査区内での検出長約 18mで、17 世紀中葉以降に埋め立てられたようです。

西の屋敷地は、城下絵図によると 17 世紀前葉と中葉、それ以降で屋敷境が変化します。その変化に対応する遺構として、溝（151-112)、細長い土坑（151-7）等を検出しました。各敷地内では、柱穴状に並ぶ土坑を複数検出し、その中には底面に礎石を据えるものも確認しましたが、建物の棟数や平面形等は不明瞭でした。その他に 3 基の井戸を検出しました。素掘り井戸（151-108）1 基と石組井戸（151-3・265）2 基です。素掘り井戸（151-108）は、深さが検出面から 2mをこえるもので、廃絶後には廃棄土坑として利用されたようです。石組井戸（151-3）は、検出面下約 2mに石組が残存しており、残存する石組みの高さは 2mに及びました。石組の下方には井戸側として底のない桶を 2 段重ねに据えていました。石組井戸（151-265）は、砂利敷道路の敷設前に機能していたもので、掘り方検出面下約 3mに石組が残存し、残存する石組みは 2mをこえました。なお、井戸上層に砂利敷道路を敷設した後、

路面上から再掘削したような痕跡が確認されました。このことから、井戸を埋めて道路を敷設したものの、陥没等のなんらかの不具合が発生したために再掘削し、改めて整備し直したことが推測されます。

遺物は、多数の陶磁器や土師皿、漆器椀をはじめとする木製品、庖丁・簪・銅銭等の金属製品、石瓦・バンドコ等の石製品、人形・土錘等の土製品等、多種多様なものが出土しました。その中でも特記すべきものとして迷子札があります。小判形の薄い銅板で、上部の穴に銅線の輪を通してあります。片面には「村尾□□(六マタハ之カ)□忰／豊三郎」と刻書され、もう片面には松の木と疾走する猪の絵が刻まれていました。なお、出土位置は調査区南端であり、城下絵図に照らし合わせると、天保年間の絵図から付近に「ムラヲ」邸の記載が認められ、慶応年間の絵図に「村尾豊三郎」の表記が確認されます。

この他、古代以前の遺構は明確でないものの、7～10 世紀代を中心とする須恵器・土師器が多量に出土しています。これらは、磨滅が少ないため、築城等に関わる造成時に近隣の微高地から土ごと移動したことが考えられます。また、僅かではありますが、赤彩土師器や鞴羽口、鉱滓等も出土しており、平安時代には近隣に一般的な集落とは性格の異なる遺跡の存在が考えられます。（御嶽貞義）

15-2 地区の遺構と遺物

15 - 2 地区は、江戸時代の城下絵図から北端で東西に流れる水路より北側が町屋、同水路南側は両側が武家屋敷であったようです。その武家屋敷を南北道路が延びており道路東側は町屋から武家屋敷へと変遷していったようです。

今回の調査では、屋敷部で4時期の遺構面を確認しました。町屋の主な遺構は遺構としては洗い場関連の遺構が2基や井戸などが見つかりました。東側屋敷地の主な遺構は土蔵の基礎と考えられる石敷きとその内側で柱穴の１本から籾殻がついたカワラケが出土しています。下層では礎石・土坑や廃棄土坑（ゴミ穴）が多数見つかっています。また、この屋敷地は17世紀中ごろまで砂利敷道路が南北方向の道路から東に延びていました。

一方の道路西側は絵図等で最大４区画の屋敷地が想定されていますが、各屋敷を区画する明確な遺構は分かりませんでした。その中で、やや大型の笏谷石も用いた1×1.5 間の規模の礎石が2間あけて対になっていることから門と想定できます。また、17世紀前半頃と考えられる面では、井戸底に石が積まれたものや柱穴の底に礎石を据えるものもなど、遺構が密集する箇所がみられました。

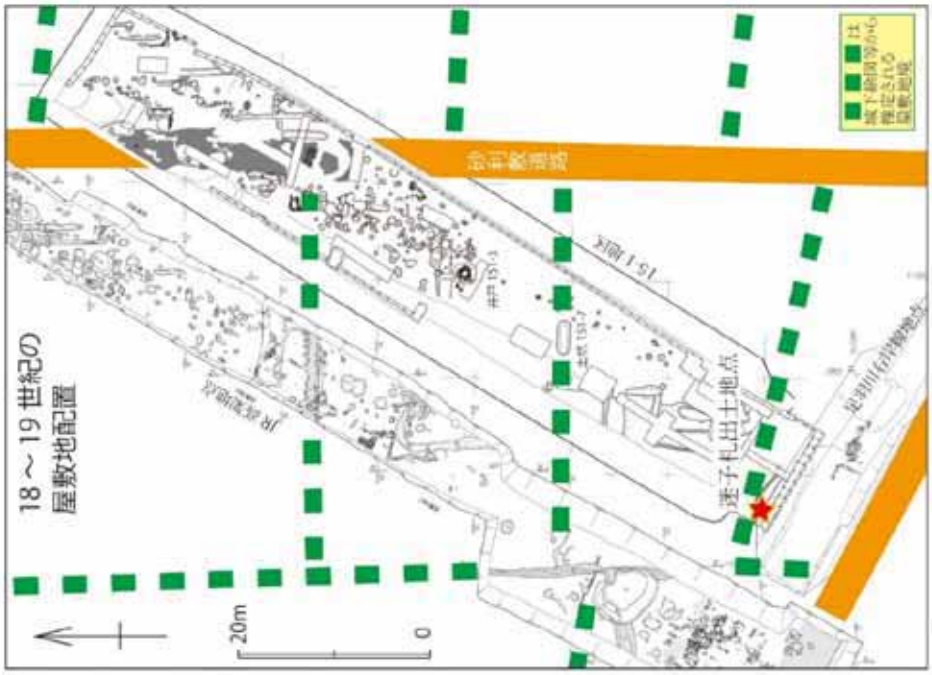
水路は幅深0.6m、深さ両側に２ｍを測り両側に笏谷石が積まれていました。石の積み方にから最低1回嵩上げされていました。これは周囲の造成時に伴い嵩上げされたと考えられます。

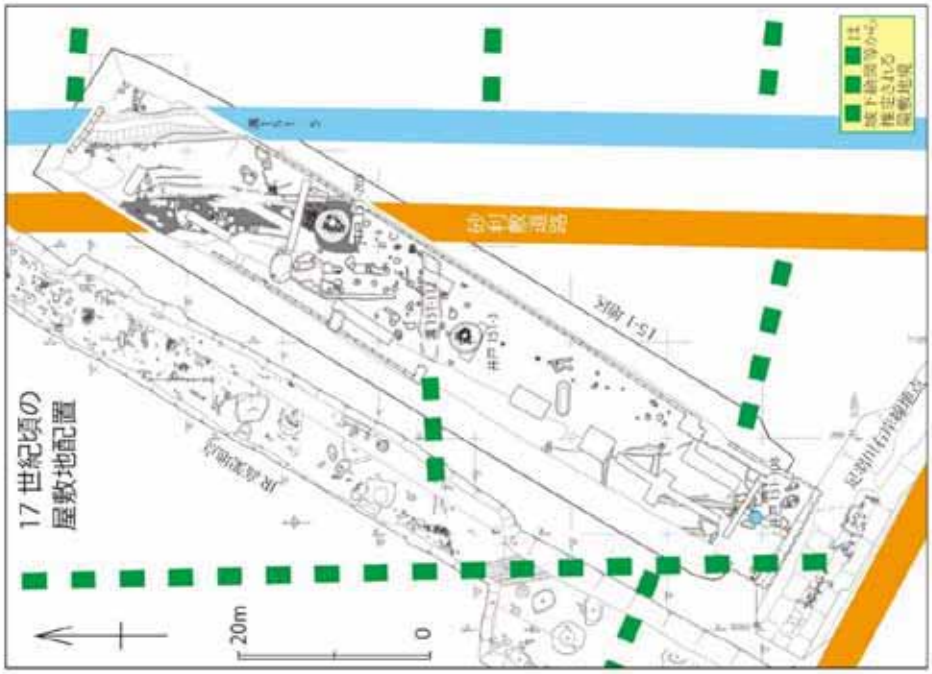
道路は砂利敷きであり、南北・東西道路とも縁石を伴っています。南北道路の縁石は石垣に使用されておもよいくらいの大きさの笏谷石が使用されていました。また、南北道路は最低でも３面の砂利面があり、道幅は17世紀初めごろに 3.6mであったのが、17世紀中頃以後5.4mと広くなっていました。

また、福井城築城以前の北ノ庄期と考えられる遺構が見つかっています。遺構としては幅3m弱、深さ約1.5mの溝や東西道路の下から井戸などを検出しました。

遺物として、陶磁器をはじめ木製器、石製品、銅・鉄製品などが多量に出土しました。町屋部から小型の船を模したなどの土製品が出土しており、町屋で作られていた可能性も考えられます。水路からは多量の遺物が出土しており、動物の骨や牛の角もあります。

（青木隆佳）





FKJ15-1 地区　屋敷地配置の変遷

溝151-5（北から）

溝151-112（東から）

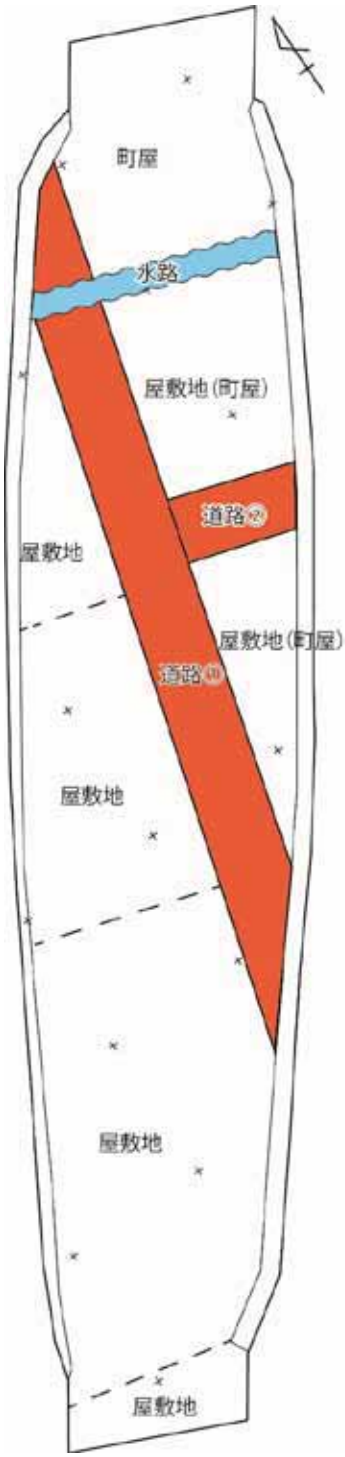
土坑151-7（北東から）

素掘り井戸151-108（北東から）

石組井戸151-3（西から）

石組井戸151-265（北から）

迷子札



15 - 2 地区　屋敷割略図

1614 年（慶長 19）

1659 年(万治 2)

1714 年（正徳 4）

洗い場関連遺構（東から）